

平成艸紙



おりおりの記

犬好きの独言

東京証券取引所自主規制法人
理事長

林 正和

子供の頃から動物が好きで、様々な種類の生き物と生活してきた。金魚、ヒヨコに始まって二十日鼠、土竜、亀、猿、伝書鳩等今でも彼らを思い出す。中でも一番縁が深いのが犬。現在も10才になるアメリカン・コッカー・スパニエルと同居しているが、彼は4頭目の犬である。月に一度のトリミングとシャンプーは半日仕事となる等手間は大変だが、家内と二人だけの生活にしっかりと入り込み、正に私達の人生のパートナーとなっている。

仔犬は愛くるしいが、老犬は味がある。自らの立ち位置を充分に知った落ちついた目付でソファでゆったりしている姿を見るとこちらも穏やかな気持ちになる。私の帰宅時に見せる嬉しそうな目、体調不良時の訴えるような目、一週間近くペットホテルに預けられた後の恨めしそうな目、飲水を催促する時の非難がましい目、正に目は口ほどに物を言いで、十分に意思疎通が図られていることを実感する。

もう四半世紀も前であるが、ワシントンの日本大使館に3年間勤務する機会を得た。パーティーなどで米国人と接する際の無難で話が尽きない話題として犬が適切とアドバイスしてくれた友人がいた。犬を飼いたい犬種は何がよいか、躰のコツはと尋ねるだけで、犬好きの多い米国の人達は甲論乙駁、席が盛り上るといふわけである。確

かに米国人には愛犬家が多いようだ。ただ可愛がるだけでなく、犬の身になって考えているように感じた。そうした雰囲気もあって、かの地で犬を求めたが、引渡しは生後2ヶ月



経過後。仔犬の将来に母親と過ごすこの期間が極めて重要ということであった。

さて我が家のコッカー君、年とともに体調を崩し、回復にも時間がかかるようになってきた。ドクターの話からは、免疫力が低下してきたことも一因のようだ。日本ではビジネス上の理由からか、2ヶ月を待たず母親から離し、ペットショップのウィンドーに並べる。また、多くの生命が人間の都合で処分されている。現在、犬の飼育頭数は一千万頭を大きく上回り、ペット産業全体の市場規模は2兆円とも聞く。文字通りペット大国である。高齢化の進展につれ、癒しを求め、経済停滞の中でも、引き続き右肩上がりが続くだろう。その中で、真にペット大国と言えるようになるにはどうすればよいか、考えてみる必要があるだろう。